

〔原 著〕

大隈重信の切断手術から健康生活へのセルフケアに関する研究

坪井良子¹⁾・津曲裕次²⁾

大隈重信は1889年10月18日暴漢の投げた爆弾によって右脚を失う事件に遭遇した。大隈の負傷は、当時の最高の医学と看護で回復することができた。大隈はアメリカ A.A. マークス社製の義足を装着して社会復帰した。当時のわが国は義足製造の技術は未熟で、義足そのものが定着していなかった。大隈の装着した義足は、わが国の義足の発達と普及に努め、恩賜の義肢へと発展していった。大隈は人生125歳説を唱え、その日常生活は規則正しく、独特の方法によって健康が維持された。生活様式を洋式化し、入浴法を重んじた。入浴時は運動と断端の保温に努め、血液循環をよくすることに努めた。精神の健康には、長生法五カ条を守り、セルフケアに徹した。大隈のもたらしたリハビリテーションは今日的観点からも意義があるものと考えられる。

キーワード：大隈重信 切断手術 義足 リハビリテーション セルフケア

I. 研究の目的と意義

明治時代の政治家で、早稲田大学を創設した大隈重信は、1889（明治22）年10月18日条約改正に反対する来島恒喜の投げた爆弾によって負傷し、右脚を失う事件に遭遇した。この事件はこれまでも、大隈重信の伝記や書物・研究にも取り上げられている。しかし、大隈の負傷から切断手術と回復までに止まっている。切断手術の詳細、その後の化膿による手術の状況と看護の詳細、さらに回復後の大隈の義足生活については触れられていない。大隈の義足については、これまで右大腿部の写真のみが紹介されている（飯田、1968⁶⁾）。

筆者は、これまで大隈重信の遭難に際して、看護にあたった看護婦の状況に関する研究に関わり、（坪井、1978⁴⁾）その後大隈重信の義足についての研究に携わってきた（坪井、1991⁴¹⁾；1993⁴²⁾；1993⁴³⁾；1993⁴⁴⁾；1993⁴⁵⁾）。これらの研究は、大隈の大腿部切断手術に際しての看護の状況を大隈綾子夫人の礼状から考察したり、大隈の切断手術に参加した高橋種紀医師記載による病床日誌、治療にあたった担当医の手紙9通、看護記録等の一次資料、義足に関する資料-A.A. Marksからの手紙等一を閲覧することによって、さらに大隈が使用した義足5本の観察と分析等から行ってきた。

本研究は大隈重信の負傷から右大腿部の切断手術とその回復、さらに義足装着に至る過程と社会復帰、その後の健康維持に関するセルフケアの一連の状況ととりあげ今日的観点から考察することを目的とする。

大隈の右大腿部切断手術から社会復帰に至る過程を究明することは、明治期の医学と看護、義肢の発達、さらに健康維持-セルフケアの詳細を明らかにすることであり、偉大な政治家がもたらしたこれらの過程は、わが国のリハビリテーション史上に意義あることと考える。

研究方法：上記資料をもとにした文献研究とし、特に病床日誌、手紙、覚え書、義足に関する資料、義足の観察等から分析・考察する。

II. 大隈重信の切断手術と看護

外務大臣大隈重信（1838-1922）の負傷事件は、1889（明治22）年10月18日条約改正に反対する来島恒喜³⁾の投げた爆弾によっておきた（トク・ベルツ、1979³⁹⁾；東京日日新聞、1889¹⁷⁾；佐賀新聞号外、1889¹⁸⁾）。

東京大学医学部のお雇い教師であったエルウィン・ホーン・ベルツ（Erwin Von Baelz）（1849～1913）はこの時の様子を次のように日記に記している。「10月18日夜10時（東京）センセーショナルなでき事その場から今帰宅したところだ（略）暗殺事件が起こった…それが大隈外務大臣に！みんなが自分を探していたのだ。そこで、馬車に飛び乗り、外務省へ。どの門も、サーベルとピストルの警官で一杯だ。（略）大隈はソファの上に横たわっていた。意識は明瞭だ。仮包帯を施した右脚の痛みは、モルヒネで和らげてあった。（略）右足内側のくるぶしの上にある傷は、その箇所で脛骨を完全に粉碎していた。脛骨の中間部も同様に、全部粉碎されていた。下腿を動かすと、骨が、まるで袋

1) 自治医科大学看護短期大学

2) 筑波大学心身障害学系

にはいつているかのように、手の中がたがた音を立てた。上腿切断手術よりほかに、施す手段がないことは明白だった。…」(トク・ベルツ, 1979³⁹⁾)

大限の切断手術には主治医の池田謙齋、橋本綱常、高木兼寛、伊東方成、佐藤進、ドクトルベルツ、高階経本等当時の一流の医師が当たった。手術時の詳細な記録は高橋種紀が「大限伯病床日誌」として残している。また、高橋種紀他の手紙によれば治療に当たっては、大限重信執務医に逐一状況報告をしながら指示を受けていたことがわかる。

1) 高橋種紀医師記録の「大限伯病床日誌」から

高橋種紀は日本赤十字社医員であり、手術者の一人として加わり、主治医の池田謙齋等の指示のもとに治療を実施する医師であった。

高橋種紀記載の病床日誌は29×20センチメートル15頁、体温表付で毛筆で書かれ、術直後から第15週に至るまでの記録である(図1)。

高橋は病床日誌記載に際して、「大腿切断手術は新奇の治療ではないが、大限伯の負傷に日本帝国の諸大家が集まって行った手術で、味曾有の事であるので記して記念とする。」と前書きしている。氏の病床日誌から受傷の状況を要約すると以下の通りである。

大限の受傷は、右下腿の複雑骨折で幸に脛骨動脈を避け、小血管を傷つけた程度で出血が少なかった。特に海軍々医総監高木兼寛が受傷後、数分で病床に駆け

付け、直に救急処置を施したために、出血が少なかったことは幸いなことであったと述べている。全身症状は、外傷性の振蕩、不安状態、受傷部の激痛、顔面蒼白、冷汗、脈拍細数、口渴等の症状があり、時々赤葡萄酒を飲料とし、疼痛には塩酸モルヒネ水を患部に注射。受傷部は石炭酸水で洗滌し、固定包帯を施して第二の処置をした。集会した医師は陸軍々医総監医学博士橋本綱常、海軍々医総監医学博士高木兼寛、一等待医々学博士池田謙齋、同伊東方成、医学博士佐藤進、医科大学教師ドクトルベルツ、医学士高階経本等で、赤十字病院から難波一、小西功、高橋種紀であった。主任者は池田謙齋で、外科的療法は橋本、高木、佐藤の三氏があたり、佐藤進の執刀によって手術が行われた。麻酔はドクトルベルツが当たり、「午後七時五十分『コロロホルム』ノ吸入ヲ施シ麻酔ノ応スルニ(略)大腿下三分一ノ處ニ於テ皮膚ヲ輪状ニ切開シテ之ヲ上方ニ反翹シ次テ筋肉ヲ切断シ骨膜ニ達シ亦之ヲ上方ニ反翹シ之ヨリ骨膜ヲ剝離シ骨質ヲ鋸断セリ(略)股動脈深股動脈及ヒ二三ノ太キ静脈管ヲ結紮シ皮膚ト筋層ヲ共ニ縫合シ内外両端ニ排泄口ヲ備ヒ疔度『ホルム、ガーゼ』ヲ貼シ固定綱帯ヲ施シテ直ニ病瘵ニ就カシメ(略)」と記されている。

病床日誌からみると、第一回の包帯交換は一週目に行い、二台の蒸気スプレーを装置し、百倍石炭酸水の蒸気で室内の塵埃を沈底して、包帯を撤去し、縫合糸を除去した。創面からの排泄はなく、清潔を保ちゴム絆創膏で創面の多開を防ぐために包帯固定を行った。断頭は僅かに炎症を起こしていたがその後の経過は良好であった。第二週から四週にかけて症状は軽快し、食欲も増進し、夜間は安眠できるようになった。第八週に至って創面は一銭銅貨大となり、全身浴を行い、来客に会い、官邸を出て私邸に移ることができるまでに回復した。第九及び十週に至って創口は殆ど癒痕で被われたが、僅かに中心一点の肉牙を残した。この週の終りに断頭に浮腫がみられ、外側の一部に腫脹疼痛を起し、皮膚の一部が暗赤色を呈し、波動を感じた。癒痕の外端に一小瘻孔を生じ、稀汁が漏れたため、縦径に「ツオル」の切開を行い、膿膜頰痂を多量に出した。此の創面は二週間で完全に癒合した。第十一週、十二週の終りに断頭は癒痕を形成し、内端部に一小瘻孔を残すのみとなったが、断腿の浮腫がとれなく、夜間の安眠を妨害し、第十三週、十四週に至って按摩法によって漸次断腿の浮腫が消失し、ようやく安眠ができるようになった。第十五週では温浴法と按摩法を施行し、断頭の瘻口より結紮糸を出して完全に治癒した。

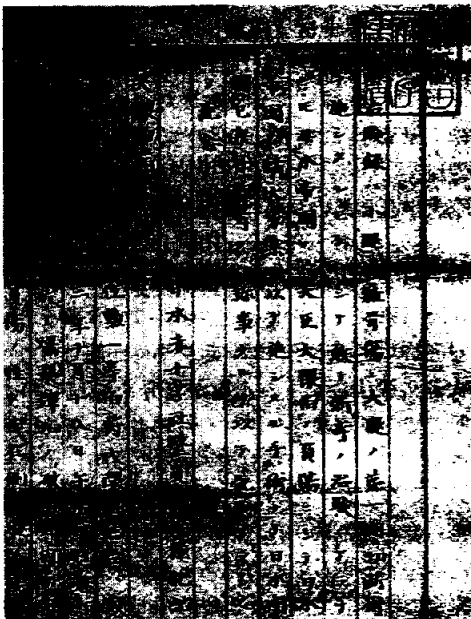


図1 大限伯病床日誌 高橋種紀記載 早稲田大学蔵

(高橋, 1889³⁵¹)と病床日誌に記されている。

以上のように切断手術の経過は良好であったが、9週目から断頭が化膿し、この化膿によって2度目の手術を受けている。それは、明治23年1月23日親交のあった新島襄の訃報に接し、大磯で最後を迎えた新島に別れの挨拶に行けなかったことを次のように記している。「…我輩は最初大手術を行ったが、それが癒えず、却って化膿してきたので更に第二の手術を行ひ、病床に横って居る中に新島君の訃報に接したのである。久しく重傷に悩んだ後であるから神経は興奮して居る。君の死を聞いて誠に感慨に堪えなかった」(立石, 1926³⁷¹)と、敬愛する新島の死に接し、深い悲しみの情を表している。

2度目の手術は12月25日過ぎで、創部の切開によって、膿を多量に排出し、治療までには第14週まで要していることから、1月25日前後までは安静状態であったと考えられる。

当時のこのような切断手術は、人命にどのような影響を及ぼしていたのだろうか。

尾崎行雄²⁶⁾は、大隈の遭難事件をロンドンで聞いて非常に心痛し、同地の名医に手術上の影響、結果などを聞いている。豊富な経験をもつ名医は次のように答えたという。「若し膝から下の一脚を切断しなければならぬとすると、それが人間の地位によって影響結果が違ふ。普通の一兵卒なら、手術を受けてから、ゆっくり帰郷して休養が出来るといふ風に、呑気に考へるから、生命に関するやうなことがない。ところが、それが佐官などになると、自身の聯隊はどうなるか、自分の将来はどうなるかと、いろいろ心配するから、どうも結果がよくない。それから将官級の人になると、一層関心する範囲が大きくなるだけに結果も益々悪い。必然、生命をなくするのが多い。それは高名の政治家とても同様である。」といわれ尾崎は悲観した。さらに他の医師にもこの事をただすとやはり同じ答えをしたという。それで尾崎は、大隈の生命は助からないものとあきらめて帰朝したが、早稲田で元気に静養中の大隈に接して、国家のために無事を喜んだという。そして尾崎は、大隈が助かったのは、豁達な楽天的精神によるものであるといっている(大隈侯85年史、1926²¹¹)

2) 看護の実際

日誌には事故当初、最初に駆けつけた医師高木兼寛(東京慈恵医院副院長・海軍病院長)が直ちに止血などの救急処置を施したために、無駄な出血を免れたことは幸いなことであったと記されている。高木はまた直ちに東京慈恵医院看護婦教育所生徒4名、松井トラ、

橋村延世、高部マツ、平野チサを派遣して看病にあたらせた(坪井, 1978⁴⁰¹)。看護婦が記したと思われる体温表、尿量、食事献立並びに摂取量、睡眠時間表などが残されている³⁾。

高橋種紀の病床日誌にはこれらの記録がまとめて記載されている。術後の様子を日誌からみると、10月18日午後11時、脈搏86、体温37.7度、不安状態が強く、顔面蒼白、四肢微冷、水溶液を2,3回吐き、頻りに疼痛を訴えた。19日午前2時四肢微冷、顔面から冷汗を流し、脈搏は頻数となり不安状態が強かったので、四肢の温罨法をし、武蘭酒を内服、その後脈搏は正常に戻り、四肢も温かくなったが半睡半醒で安眠は出来なかった様子。その後1週間は不安定ではあったが、日を追って軽快していった。体温は36.9度間を昇降、脈搏は68から110の間を上下、疼痛は第四日に至って殆ど消失したが、包帯の窮迫感を訴えることが多かった。食事は一日の平均牛乳143グラム、スープ202グラムその他鶏卵1.5個、米粥、鳥肉、野菜等を少々摂取した。尿閉があり、浣腸にて大便の排泄あり。身体諸部に疼痛、倦怠感、違和感を訴え、安眠することは難しかった、と記されている。

大隈の切断手術後の状況は新聞紙上で報道(東京日日, 1989¹⁷¹; 時事, 1989¹⁹¹; 扶桑, 1989²⁰¹)された。明治22年10月26日の扶桑新聞では「大隈伯の容体 去22日午後3時の体温は37度3分脈搏84、同6時37度5分と78、同10時37度6分と84にして同日の食物全量は牛乳95.0、ソップ220.0鶏卵3個米飯少量、刺身、野菜、水菓子各少量と赤葡萄酒八食匙なり而して再昨23日は午前零時より朝まで安眠神経爽快にして舌苔なく口味食思稍や振ひ午前6時の体温は37度7分にして脈搏は82なりし」と掲載されている。

大隈の容体は経過はよかった。それは大隈自身の健康な身体と楽天的な性格、綾子夫人の決断の速さや優れた医師の技術によるものであった。大隈は、手術の際「足を切断したら、身体の血が余計に他の部分へ行くから宜い」と考えたという。(大隈侯85年史, 1926²¹¹)綾子夫人(1850-1924)は、大隈の遭難に際して、集まってきた医師らが相談し、切断することに決まり、夫人に諮った時、「屹と覚悟の色を浮かべて、この類の手術は一刻も早く行わぬと、効果がうすいと平生から聞いてをります。只今親戚をあつめて相談しては、まったく手遅れとなるでせう、主人の承諾ある上は直ぐ手術を願いたう存じます。…」と即断し、少しも狼狽しないで、素早く家人や使用人に命じて看護の準備をし、常時大隈のかたわらに付き添い、夫を慰め、大

勢の来客に接し、その苦心と配慮は尋常ではなかったという。手術後の回復が早かったことは、夫人の決断の速さに負うところが少なくなかったという（大隈侯85年史, 1926²¹⁾；市島, 1922²²⁾。しかし、夫人は夫の外傷の急性期を脱した頃から、看病疲れから軽度の発熱がみられている。11月13日から、18日まで綾子夫人の体温と脈搏の看護記録には、体温38度～36度台、脈搏120～90の記録が残され、薬の投与を受けている²³⁾。

看護婦達の看病の様子は、綾子夫人から慈恵医院宛ての礼状（明治23年1月13日）に見ることができる。礼状には「…重信儀向キニ不慮ノ難ニ罹リ殆ど起ツ能ハサル大患ニ腐リ特ニ慈恵医院ノ看護婦ヲ請フテ扶掖ヲ托シタルニ其事ヲ執ル周到綿密其務ニ従フ細心誠意能ク医家ノ旨ヲ承ケテ着々機ヲ誤ラス病者ノ意ヲ迎へテ聲ナキニ聞キ形ナキニ見一動一作看護婦タルノ実ヲ見ササルナキハ数十日ノ久シキ妾カ日夜傍ラニ在リテ実見スル所ナリ…」とある。特に周到綿密にその務に従い、細心誠意その職務に当たり、着々と機を誤らないで、病者の意を汲んで、声なきに聞き、形なきに見て、その一動一作が看護婦として立派であったと述べられている。これは看護における観察の真髄でもある。看護婦生徒たちの一挙一動から、このような観察をなしたことは、当時の看護婦生徒達がいかに誠心誠意大隈の看護にあたったかを知ることができる。また、側で終始付き添い、かけがえのない夫の看病にあたっ

た綾子夫人の実感でもあったであろう。（坪井, 1978⁴⁰⁾）

大隈はその後、体力も順調に回復し、明治22(1889)年12月18日以降は重要な談話も許可され、少しづつ復帰していくことが可能になった。このことは同11日付の池田謙斎・高木兼寛・橋本綱常連名の診断書に記されている²⁴⁾。

大隈は、回復に際して記念写真を撮影している。椅子に座った大隈を中心に、最前列に大隈を囲むようにして、看護に当たった生徒4名、左から松井トラ、橋村延世、高部マツ、平野サチが並んでいる。大隈が看護婦生徒らの看護を信頼し、いかに彼女らを尊重していたかを偲ぶことができる（写真1）。

III. 大隈重信の義足

大隈は大腿部切断に関して2度の手術を受けた。その後の経過は順調で、隻脚ではあったが義足と杖の生活での社会復帰であった。義足を装着した日時については不明であるが、大隈は1890（明治23）年5月13日天皇・皇后両陛下に拝謁し、御礼を言上するために参内している（大隈侯85年史, 1926²¹⁾）。この時はじめて義足を装着して両陛下に拝謁したものと推測できる。したがって同年5月13日以前から義足を装着し、歩行練習を重ねていたものと考えられる。

大隈は手術後すぐにアメリカ A.A. マークス社から義足が送られてきたと述べている。しかも毎年改良に改良を加えて送ってきたというところから（鈴木, 1902³³⁾）、最初に大隈が装着した義足は、アメリカ A.A. マークス社製であったものと思われる。

当時（明治23年）わが国の義足製造技術は未熟で、義手足の製造数も少なく、それを専門にするものはいなかった。

義足製造に関して、アメリカ A.A. マークス社に依頼し、その仲介をしたのは高木兼寛であったと考えられる。高木は、大隈の遭難の始めから治療にかかわり主治医の一人でもあったこと、また、成医会会長であった高木が発行している成医会月報（THE SEI-I-KWAI MEDICAL JOURNAL）に1年余にわたって、A.A. マークス社の義足広告が掲載されている（SEI-I-KWAI, 1891³⁴⁾；図2）ことからみても高木が大隈の義足紹介をしたものとみて間違いはない。

また、A.A. マークス社から大隈宛ての手紙（大隈重信文書, 1895²³⁾）には次のように記されている（図3）。大隈が同社の義足を使用していることに対する感謝と推薦文の再録願いが記され、同社の義足は、ジョージア州アトランタ市で行われた国際博覧会で連続第1位



写真1 大隈重信回復写真
慈恵看護専門学校蔵

義足は足の指も5本精密に作られている。

前記A.A.マークス社製の義足広告では、その冒頭にARTIFICIAL LEGS AND ARMS WITH RUBBER FEET AND HANDS MARKS PATENTSとあるところから足部がゴムで出来ているこの義足はA.A.マークス社製のものであることは間違いない(坪井, 1993⁴⁴⁾)。

写真4

この義足は17×15cmの前後にやや長い楕円形のソケットで、金属で型どられ、その内外側は柔らかな皮張りで作られている。大腿部の中央辺りに懸垂のためのバンドの止め具がつけられていた。単軸の膝継手はレバー操作によってロックされる。中央よりやや後方にあるこの軸には、膝屈曲時に、下腿よりのびたチェーンが巻き付いてバネが引き伸ばされ、伸展時に補助する仕掛けになっているが、その力は余り強くない。足関節は固定されているが、踵部と前足部がゴム製で、現在のSACH足に似ている。この義足は写真3と類似している点が多い(坪井, 1993⁴⁴⁾)。A.A.マークス社製のものであろう。

写真5と6

この2本の義足は木の上に皮を張って作られ、他の3本とは形、色も異なっている。膝関節は屈曲できるが、足関節はない。両義足ともA.A.マークス社製のものとは明らかに異なっている。現存する「恩賜の義足」(日中戦争中に製作された)との類似点が多い。恩賜の義足は、日清・日露戦争時、日中戦争時とあまり進歩していなかった(坪井, 1994⁴⁶⁾)。製作者は不明である

が、大隈は、義足はアメリカ製がよいが、わが国で上手に製作するのは本郷の万木九兵衛で、そこに器用な職工が一人いて、義足者に適合するように製作するが、その製造法はまだまだ幼稚であるといっている(鈴木, 1902³³⁾)。

万木九兵衛は日清・日露戦争時の恩賜の義肢製作者として指定されている(陸軍省編, 1908²⁷⁾)。写真5、6は万木九兵衛店の製作であるかは不明であるが、恩賜の義肢との類似点が見られることから、日本製であろうと考えられる。写真5は、右側の内側、とくに親指側にのみ傷みがあるところから右下肢は内側についての歩行であり、良好な歩態ではなく、歩行が困難であったと考えられる。

写真6は、一本だけ箱に丁寧に保存されており、色は写真5とほぼ同様で、最も美しい義足であった。よく見てみると、サスペンダーがほぼ完全な形状を保ち、ソケットの内径は16.5×15cmのやや楕円形で、内側の会陰部に接する箇所はカットされ、柔らかい皮のストラップが張ってある。大腿部の内外側には懸垂装置があり、これは2本の肩吊り帯へと連結している。サスペンダーの肩に当たる部分は、白い絹の生地で覆われ、ソケットの下方には同じく白い絹地の小さなクッションがおかれていた。肩に当たる部分の覆いとクッションは、義足による痛みを少しでも緩和するようにという大隈夫人の配慮による手作りであろうか。

単軸の膝継手の後方には伸展を強く補助するための工夫がこらしてある。屈曲時に、スプリングが押し下げられ、遊脚時にはその力で伸展が可能になる仕組み



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

写真2～6 大隈重信の義足(早稲田大学蔵)

になっていた。足関節は固定されており、木製の足部はきれいに皮が張っており、足底部には柔らかい皮が使用されていた。本義足は膝関節の屈曲は可能だが、正座はできない。それらを見るとあまり使用されなかったと思われる。この2本はあまり使用されなかったものと思われる(坪井, 1993⁴⁵⁾。

鈴木は、1901(明治34)年11月9日大隈重信を訪問して義足の対談をしている。それをまとめると次のようである。

大隈は病後反って丈夫になり、切断足も運動をしているため痩せることもないが、患足よりも健足に力が入るために健足のほうが太く、患足よりも健足に疲労を感じるという。義足は就寝時には外すが、朝6時から夜10時まで着用し、適度に運動をしている。坂の昇降は、昇りは杖が不用だが、下降時は杖が必要であると。夏冬の義足着用時の困難な事は、冬期は毎日運動をするために冷気を感じる事もなく差支えないが、夏期は発汗に苦勞する。初めは、幻肢感があり、嫌な感じがしたが、最近はそれもない。義足者は時々神経痛を起こすことがあるので、海岸の砂を取り寄せ袋に入れて患足に当て、保温をすれば神経痛は起こらないとっている。義足の具合については、アメリカ製造の義足が一番良いといい、それは改良に改良を加え、改良点を十分に説明して送って来るなど親切であるが、わが国の義足製造は、不親切で不熱心であるといい、わが国には未だ徳義心が発達していない。このことは憤慨に堪えない事であるといっている。アメリカにおいてもまだ改良しなければならない点が多いが、わが国に至っては職工の不熱心なこと、そして不完全なことは甚しいという。義足は目方を軽くして、値段を安く⁴⁶⁾することに心がけなければならないといっている(鈴木, 1902³⁹⁾。

大隈の義足生活は、夏期になると義足の当たる断端部が擦り剥け、その痛みで度々発熱することがあった。断端に食い入るような痛みを誰にも伝えず、時には一睡もしないで、応急処置をして痛みを堪え、客と接し放談高論し、閣議に出席した(大隈侯85年史, 1926²¹⁾。

大隈が装着した義足は当時最も進歩した義足であった。わが国では、それを見本として義足製作に当たったこと、そして恩賜の義肢にまで発展していったことは容易に想像できる。

IV. 大隈重信の日常生活

大隈の日常生活は極めて規則正しい生活であった。その生活は多忙を極め、特に首相になってからはそれ

は言語に絶していたという。大隈は義足のために椅子の生活にし、健康にはよく注意した。

大隈は、爆裂弾を投げられた当時の追懐談で、「爆裂弾は屁の如し」であるといい、「余は爆裂弾位で青くなるような腰抜けぢゃない。」「爆裂弾を放りつけたものを、狂気の人間で、憎い奴とは思わない。却って、当時の輿論を覆さんとする其勇氣は、蛮勇でも何でも、其勇氣に感服する。暗殺者は如何に勇猛とも、我が輩の三寸不爛の舌頭を奪う事はできなかった。」(立石, 1926³⁷⁾)と述べている。また、「中央政府にひとしい、わが輩の脳の中樞が破壊されない限り、足の一本や二本あってもなくても大したことはない。ただこの際感じたのは、実に、人の運命というものは一瞬の間に決まるということである。」(木村, 1969¹²⁾)と。

大隈は、爆裂弾を投げた来島恒喜には寛大で思いやりが深かった。来島の葬儀には人を派して会葬させたり、来島の追悼法会毎に香料をおくり、後には侯自身が法会に臨んで霊前で追悼演説をしたこともあったという(市島, 1922⁹⁾。

大隈は人生125歳説を唱え、自ら早起きや、上体をきたえるために鋸で木を挽いたり、散歩に心掛け、園芸に精をだし、入浴で運動をすることを日課としていた。入浴は血液を万遍なく全身に流通させるためであり、伯の健康は入浴に負う事が多かったという。平生極めて健康に注意したが、特に精神の健康には自ら考えた長生法五カ条がある。怒るな、愚痴をこぼすな、過去を顧みろな、望を将来におけ、人のために善をなせであり、自らその五カ条に信念をおいた(渡辺, 1952³¹⁾; 榛葉, 1989³⁰⁾。

早稲田大学百年史によれば「伯自身は片足を爆破されて以来、階段の上がり下がり困難なため、残念ながら講堂で開かれるどんな集会にも出席出来ない」(早大編, 1978⁴⁹⁾)と早稲田学校の創立10周年記念式典にも出席できなかったことが記されている。

先の対談では杖を用いて階段の昇降が出来ると述べているが、日常生活と式典での昇降の場を大隈自身が意識したのであろうか。

大隈が義足による生活になってからは、綾子夫人が常時付き添い、こまやかな配慮のもとに側を離れることはなかった(榛葉, 1989³⁰⁾)。また、始終、側にいて起居を助け、夏は努めて周囲を涼しくし、冬は特に部屋を暖めて、傷口が痛まぬように注意するなど、すべてに行き届いた心遣いがみられた(大隈侯85年史, 1926²¹⁾。

大隈は大正5年1月13日第2回の爆弾事件に遭遇し

た。幸にも危難を免れる事ができた。その時も平気で、殆どそれを知らぬものごとくふるまっていたという(市島, 1922⁹⁾)。

明治45年7月明治天皇の病が重いと伝え聞くと、大隈は脚の痛みをこらえて、毎日宮中においてその病状を知るまでは戻らなかった。とくに危篤状態になった時は、痛みをこらえ、脚に麻酔薬を塗り、鎮痛剤を飲んで参内した。その時のことを「御寝殿の入口にひざまずいて、御寝床をチラと拝してからは、3日まえからの痛みなど忘れてしまった。感情が高揚しているときには、肉体の痛みなど感じないものだ」と雑誌記者に話している(棟葉, 1985³⁰⁾)。

大隈は佐賀県私立盲啞学校での講演では、自らを不具者と称し、次のように講演した。「此處に76のお爺さんがいる。誠に此の目の見へないと云ふのは不始末であるが耳や指の鋭い力があるから不自由を感じずることは少ない、そこで豫て神や佛を信仰して指の力、腕の力、脚の力などを便りに楽しんでいかねばならぬ、一體目の見えぬものは普通の者よりも手足や指の感覚が強いから後には指の先で新聞なども読めるようになる、此のお爺さんも手や目は利いても足が1本のカタワである、けれども何も心配せず楽しんで居ればお前達も不具者であっても楽しみとせねばならぬ…」(伊東, 1913¹⁰⁾)と、自分に残された機能を最大限に活用することを説いている。また、戦争によって障害者となった廃兵にたいしても講話を行っている。

大隈は晩年、胆石を3回病んだ。1917(大正6)年8月22日から8月27日までの詳細な看護記録が残されている(図4)。最初の発作の時であろう。「8月22日朝不快感あり午前7時頃肝臓部及び心窩部ニ疼痛ヲ訴フ体温38.6度ニ昇ル…」と記録されている。

大隈は家人その他に極めて思いやりが深く優しくかったという。「看病についてくる夫人の老体を気遣い、…看護婦に向かっては、夜分なるべく別室に退いて休息するように命じた。そしてどんなに苦しくても声を出して看護婦らを叱り付けたことは一度もなかった。そして自ら不治の病を知らぬかのように看護婦達に「若い女がこんな老人の側にいるのではさぞ眠くて、退屈だろう」といって興味ある世間話などした」(大隈侯85年史, 1926²¹⁾)という。

最後には攝護腺癌腫と萎縮腎により、1921(大正10)年12月23日以降は、食欲不振が続き、羸痺が著しく、その後癌腫が転移し、衰弱甚だしくついに帰らぬ人となり、1922(大正11)年1月11日84歳でその生涯を閉じた(大木, 1922¹⁶⁾)。護国寺の杜に「従一位大勲位侯

爵大隈重信墓」として、また、佐賀市赤松町の竜泰寺に眠っている(佐賀市, 1995²⁹⁾)。

V. 考察

大隈重信は、政治家として暴漢に襲われ、右大腿部を切断する手術に遭遇した。遭難直後、高木兼寛が受傷後直ちに救急処置を施したこと、当時の最高の医学者による大腿切断手術と看護をもって一命を取り止め、回復することができた。米本(坪井・米本, 1993⁴³⁾)は、大腿切断手術に関する基本的な手技は、現代的視点からみてもよく行われているのに驚きを覚えると述べている。大隈の大腿切断という手術が、本人に与えるボディ・イメージや全身状態への影響、さらには家族や社会に及ぼした影響は大きかったであろう。これには大隈の楽天的な性格と夫人の切斷への決断力の速さにも負うところが少なくなかったといえる。

大隈は鈴木祐一との対談で、はじめ幻肢痛による嫌な感じはしたが、その後あまり感じなかったといっている。大隈の場合は、急激に切斷に至ったため幻肢痛が少なかったとも考えられる(井川, 1991⁷⁾)。

こうした治療と看護、心理的状况は現代的観点からも、その新新さに目を見張るものがある。

回復後社会的に自立していくためには、義足が必要であった。義足は当時のわが国ではまだ定着していなかった。義足は人にとって形態的にも機能的にも重要

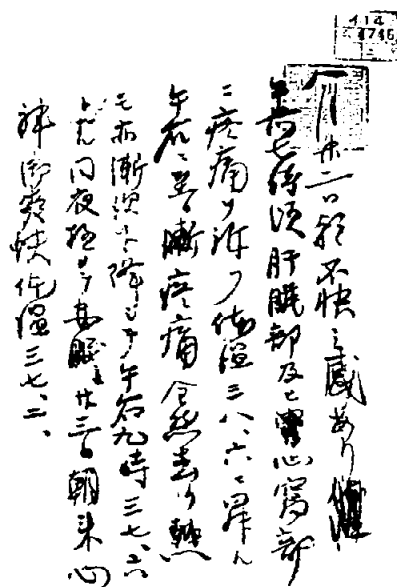


図4 大隈重信の看護記録(大正6年)早稲田大学蔵

な役割を持ち、歩く機能を使って移動を行い、生活を自立させ、その人の生活空間に広がりとし生活行為を文化的に作り上げていく役割を果たす。

大隈は当時最高といわれたアメリカA.A.マークス社製の義足を装着することができた。最先端の技術をもったA.A.マークス社製の義足は、わが国の生活には適合しなかった。つまり、義足が座る生活になじまず、膝関節が破損しやすかった。大隈は、A.A.マークス社製の義足でもまだまだ改善が必要であるといい、当時のわが国は義足の製造技術が未熟であったこと、義足製造者が、不親切で不熱心で、徳義心が発達していないことを指摘して憤慨している。義足製造の進歩が、義足装着者の心理面に与える影響が大きいことを物語っている。

永井(1974¹⁵⁾)は切断者の心理的発現時期や程度には、疾病・損傷の種類という因子はもちろん病前性格、職業、その他切断時の心理反応や合併症(幻肢との関係が明らかである)などによるところが大きい、と述べている。また、Fishman, S.は、切断のリハビリテーションに成功するかしないかが、切断前性格や心理反応にかなり左右されることを強調している(永井, 1974¹⁵⁾)。

大隈は障害者として、32年間義足生活の人生を歩んだ。その日常生活は多忙を極めながらも、終始断端の痛みと苦痛に悩まされた。しかし、持ち前の豪快さと、側には常時夫人が付き添い、細やかな配慮のもとにその生活があった。また家庭では長女熊子をはじめとする温かい支援があった。大隈は障害を負ってからは、特に健康に注意した。早起きや、上体をきたえるために鋸で木を挽いたり、散歩に心掛け、園芸に精をだし、入浴で運動をすることを日課としていた。大隈の健康は入浴に負う事が多かったという。大隈は人生125歳説を唱え、その健康法は、極めて規則正しい日常生活と、独特の健康法によった。生活を洋式化し、適度の運動と入浴法により、特に断端の保温に努め、血液が全身に流通するように努めた。これは積極的な生活の中から編み出された養生法がもとになっていた。精神の健康には長生法五カ条があり、自己ケアに徹した生活ぶりがあった。また盲の生徒にも他の機能を生かすこと、精神的心得を説くなど、自らの体験と障害者としての実践からでた生き方を説き、政治家として、教育者としての生き方を動機づけとして、自らを範とした大隈の障害観・人生観を垣間見ることができる。

当時、人間の健康や寿命は、修行、養生次第で、健康はその人が本来もっている自然の「伸びゆく力」を

生かすことであるという、「養生訓」(貝原, 1961¹⁴⁾)を範とする考え方が浸透していたが、大隈は障害を持つ自らの生活の中から、大腿部の断端を保護しながら、自己の健康法を考え、積極的に、徹底的にそれを実行した。そうした点は、現代的観点からも大いに評価できるものである。また多方面にわたる分野、特に健康・衛生・栄養面での講演活動を全国的に頻回に行い、その普及にも努めた。それを可能ならしめたものは義足の存在があったことによる。そして自らの生活から編み出した健康法と、自身に合った義足の改善、つまり血の通った義足の開発を夢見ながら、自らを義足に合わせる努力をもした。障害をもつ大隈には、周囲の温かな支援があった。とくに夫人をはじめ家族の協力が日々の生活のQOLを高めたに違いない。大隈は人生の活躍期の約2分の1を障害者として歩み、健常のままであったなら、見えなかったであろうことごとをも、認知しえたであろう。これらの生き方は今日の健康維持、特にセルフケア行動、リハビリテーションの観点からも、ADLの拡大とQOLのバランスを考えた生き方であり、そうした側面から率先した健康維持へのセルフケア行動であったといえる。

文 献

- 1) Edward, J. W. (1960): Artificial Limbs America Academy of Orthopaedic Surgeons: Orthopaedic Appliances Atlas: A Consideration of Aids Employed in the Practice of Orthopaedic Surgery Ann Arbor, Mich. (Vol. 2) 6-9.
- 2) 円城寺清編(1895): 大隈伯昔日譚、立憲改進黨々報局刊。
- 3) Fiegel, O・Feuer, S. G (1966): Historical development of lowerextremity prostheses. Archys Phys Med Rehabil 47:275-285.
- 4) 婦人矯風会発行: 婦人新報第1号(明治28年), 第154.5号(明治43年), 第157.8号(明治43年), 第160号(明治43年), 第165号(明治44年), 第167号(明治44年), 第172号(明治44年)。
- 5) 御遺難の際書状(1889). 大隈大臣内医局手紙8通, 食事、尿量、睡眠時間の記録, 大隈綾子夫人の体温、脈搏の記録, 診断書。(一次資料)早稲田大学蔵。
- 6) 飯田卯之吉(1968): 特色ある日本の義肢, 臨整外, 第3巻第10号, P879-882.
- 7) 井川幸雄(1991): 幻肢痛については、脳の中枢に

- 痛みの記憶がすでに形成されている結果から痛みを覚えることになる。幼少時や急激に切断に至った人の場合も痛みは少ない。東京慈恵会医科大学井川幸雄名誉教授のご指導による。
- 8) 市島謙吉編(1922)：大隈侯座談日記。「文明協会講演集」切抜合う綴
 - 9) 市島謙吉(1922)：大隈侯一言一行。早稲田大学出版部。P221-222.
 - 10) 伊東祐毅(1913)：鍋島閑叟公。伊東祐毅発行。P37-38.
 - 11) 貝原益軒著。石川謙校訂(1961)：養生訓・和俗童子訓。岩波書店。
 - 12) 木村 毅(1969)：大隈重信叢書第一巻、大隈重信は語る。早稲田大学出版部。P271.
 - 13) 来島恒喜(1859-1889)は、福岡出身で国粹主義団体玄洋社に所属していた。外相官邸で大隈を襲い、右脚切断の重傷を負わせた後その場で自殺した。(東京日日新聞明治22年10月19日。佐賀新聞号外明治22年10月19日)
 - 14) 松本福松著(1904)：義手足談、いわしや松本器械店発行。P8-9。松本福松の経営するいわしや松本器械店でのA.A. マークス社製の義足(大腿切断用、膝関節離断用、下腿切断用)は、明治37(1904)年では100ドル(200)円で、日本製では大腿切断用-特別製45円、普通製35円であった。この頃の小学校教員の年間所得は120円位であった(人事院給与局編：官吏給与法令集)ことから、一般庶民はA.A. マークス社製の義足装着は容易ではなかった。
 - 15) 永井昌夫(1974)：リハビリテーション心理学。記録社リハビリ出版。182-201.
 - 16) 大木栄助(1922)：大隈侯記念写真帖。早稲田大学出版部。P4-5
 - 17) 大隈外務大臣に爆弾を投擲(1889)：明治22年10月19日東京日日新聞
 - 18) 東京電報刺客大隈伯を打つ(1889)：明治22年10月19日佐賀新聞号外
 - 19) 大隈外務大臣右足を切断(1889)：明治22年10月20日時事新聞。
 - 20) 大隈伯の容体(1889)：扶桑新聞第727号。明治22年10月26日。
 - 21) 大隈侯85年史編集会(1926)：大隈侯85年史。P140.166.168-169. P170-174. 760-772.
 - 22) 大隈重信君演説(1906)。精神病に対する雑感。神経学雑誌：第4巻第12号。明治39年3月5日発行。
 - 23) 大隈重信文書(1895)：Marks. A.A. Kato. t. Dec. 12. 1895. p282. C529. 早稲田大学蔵。
 - 24) 大隈重信の義足5本(1990)：早稲田大学蔵。写真4の義足は佐賀市大隈記念館に平成6年1月31日に早稲田大学から寄贈され、4月10日から「新規展示」A.A. マークス社製として公開されている。
 - 25) 大隈侯85年史(1916)：大隈侯85年史編集会編。婦人新報(1910)：第157.8号。大隈伯と矯風会。P1.大隈綾子夫人は江戸幕府の舊旗下三枝七四郎(頼永)の第二女として1850(嘉永3)年10月25日に築地で出生した。三枝家は維新前禄800石を領し、豊かであった。夫人は美貌で厳格な教育を受け、特に礼儀作法に習熟し、23歳で嫁した。夫人はアメリカ婦人倶楽部同盟会名誉会員になった。また、大隈重信は日本キリスト教矯風会名誉会員として、綾子夫人は名誉終身会員であった(婦人新報157.8)慈恵会会員でもあった(慈恵医院報告書)。1924(大正13)年4月28日不帰の人となり、護国寺に永眠している。
 - 26) 尾崎行雄(1859-1954)政治家。明治15年(1882)立憲改進黨創立に参加。大正初期以来護憲運動に活躍。犬養毅とともに「憲政の神様」といわれる。(日本語辞典。講談社)
 - 27) 陸軍省編(1908)：明治37・8年戦役陸軍政史P281.
 - 28) 定藤丈弘他編(1993)：自立生活の思想と展望。ミネルヴァ書房。
 - 29) 佐賀市、大隈記念館パンフレット(1995)
 - 30) 榛葉英治(1985)：大隈重信-進取の精神、学の独立(下)新潮社。P256.
 - 31) 榛葉英治(1989)：幕末・維新の群像第3巻。大隈重信。PHP研究所。
 - 32) 砂原茂一著(1990)：リハビリテーション。岩波新書。
 - 33) 鈴木祐一著(1902)：義手足纂論。南江堂。P198-203.
 - 34) THE SEI-I-KWAI MEDICAL JOURNAL (1891.7.~1892.7.). VOL. 10. NO 7.~VOL. 11. NO. 7.
 - 35) 高橋種紀記(1889)：病床録。(大隈重信負傷の治療録原書)早稲田大学蔵。
 - 36) 高野善一編(1964)：大隈重信のことば。稲言社。
 - 37) 立石駒吉編(1926)：大隈伯社会観。文成社。P202-209.

- 38) 土屋喬雄監修, 荒木昌保編著(1976): 明治百年史叢書, 新聞が語る明治史, 原書房。
- 39) トク・ベルツ編(1979): ベルツの日記(上), 菅沼竜太郎訳, 岩波書店, P149-150。
- 40) 坪井良子他(1978): 慈恵における看護教育史-高木兼寛と教育方針看護教育19(2)P118。
- 41) 坪井良子(1991): わが国の明治期における義肢の研究, 筑波大学大学院教育研究科修士論文。
- 42) 坪井良子、津曲裕次(1993): わが国の明治期における義足の発達, 筑波大学リハビリテーション研究 2 (1)P3-9。
- 43) 坪井良子、米本恭三(1993): 大隈重信侯の義足 I, クリニカルリハビリテーション 2 (8) P672-673。
- 44) 坪井良子、米本恭三(1993): 大隈重信侯の義足 II, クリニカルリハビリテーション 2 (9) P744-745。
- 45) 坪井良子、米本恭三(1993): 大隈重信侯の義足 III, クリニカルリハビリテーション 2 (10) P828-829。
- 46) 坪井良子、津曲裕次(1994): わが国の明治期における恩賜の義肢の研究, ーリハビリテーション史の視点からー, 自治医科大学看護短期大学紀要, VOL. 3, 1994, P29-39。
- 47) 坪井良子(1994): 大隈重信侯の負傷から社会生活への適応過程, 日本看護学会集録-看護総会- P76-78。
- 48) 早稲田大学編集(1963): 大隈重信生誕125年記念展覧, 早稲田大学出版部。
- 49) 早稲田大学大学史編集所編(1978): 早稲田大学百年史一巻P633
- 50) 早稲田大学編集(1988): 生誕150年記念、図録大隈重信-近代日本の設計者-, 早稲田大学出版部。
- 51) 渡辺幾治郎著(1952): 大隈重信, 大隈重信刊行会, 1952, P367-369。

[付 記]

本研究に当たっては、次ぎの方々のご指導、ご教示を仰ぎました。この場をかりて深くお礼申し上げます。早稲田大学図書館特別資料室。早稲田大学史編纂室 関田かおる様。早稲田大学濱田義孝様。東京慈恵会医科大学米本恭三教授。

How Marquis Shigenobu Okuma Overcame His Injury to Regain a Healthy Lifestyle Through Self-care

Yoshiko TSUBOI and Yuji TSUMAGARI

One of the great statesmen of the Meiji Era and also the Founder of Waseda University, Marquis Shigenobu Okuma was attacked on October 18, 1889 by someone who opposed the treaty revisions he supported. The bomb that was thrown at him did not take his life but he did lose most of his right leg in that encounter. In regards to his return to Society upon recovery of the amputation of his right leg and his use of the prosthesis, it could be said that his efforts to recover and return to a "normal" lifestyle were peculiar to the Marquis.

RESEARCH OBJECTIVES

The purpose of this report is to examine how Marquis Okuma experimented with the prosthesis, his view on the obstacles that had to be overcome and the process of adapting to society.

This research is based on a rare clinical report that describes the leg injury incurred by the bomb explosion and the amputation of the leg. There are also letters obtained describing what Marquis Okuma had to overcome in using the prosthesis.

RESEARCH METHODS

An analysis and examination will be done on research literature, clinical reports, letters, recollections and any other literature on prosthesis obtained regarding Marquis Okuma.

SUMMARY

At the time Marquis Okuma was injured, medical technology and nursing care had progressed immensely and these factors helped to speed his recovery. Even when we look back at this period, we cannot be anything but amazed at how much progress had been made in so short a time. However, one shortcoming was that the manufacture of prostheses was still in its infancy yet and Marquis Okuma was obliged to use a prosthesis manufactured by A.A. Marks, an American company.

The use of this American prosthesis began the development and manufacture of prostheses in Japan and the Japanese-made prostheses were given as imperial gifts, especially to military veterans.

It is said that Marquis Okuma knew and believed that any human could live to the age of 125 years and he strived to maintain a strict and orderly lifestyle to prolong his life span. He tried to adopt the western style way of living in every way possible. He realized the importance and the benefits gained from bathing, not just for cleanliness but also for the improvement of the blood circulation.

While bathing, he would always massage himself and pay special attention to the stump of his right leg. Which was always tender due to the constant rubbing and irritation caused by the prosthesis. To maintain good mental health, he tried to follow five conditions that would help prevent senility. Marquis Okuma's rehabilitation was strict and organized and can be regarded as a model to be followed, even in this era of modernization.

Key Words: Shigenobu Okuma, amputee, prosthesis, self-care.